

いき活かわら版

北九州市「いきがい活動ステーション」(いきステ)の月刊情報紙

第56号

2022年9月20日

発行
いきがい活動ステーション

紙芝居で伝える 「ふれあい」の大切さ

自転車の荷台に載せた木枠の舞台上で演じる「街頭紙芝居」。戦前生まれの人はもちろん、団塊世代前後の人も一度は見たことがあるのでは？ その昔懐かしい街頭紙芝居を、伝統芸として守り継ごうと活動している人が北九州市にいます。「紙芝居」が持つ「絶やしてはならない魅力」と「忘れてはならない大切なもの」とはいったい何なのでしょう。

■お互いを尊重する対話力

田中^{とみや}昭さん(52) 小倉北区は、高校卒業後、電気通信機器関連会社、ニシム電子工業(株)に就職し(現在は佐賀工場勤務)、仕事の傍ら「自分の欠点を克服しよう」と、コミュニケーションの勉強を始めました。



▲田中さんの紙芝居に大喜びの子どもたち(山田緑地で)

そして互いを尊重しながら自分の考えをきちんと伝えることの大切さを知り、それを他人にも広める方法を模索していた15年前、紙芝居の作品と芸を守り続けている「三邑会」という団体が大阪にあることを知りました。三邑会は、戦前から街頭紙芝居の普及に活躍した塩崎源一郎という人が所有していた2万点余の作品と芸を守り継いでいる団体で「塩崎おとぎ紙芝居博物館」も運営しています。そこを訪ねた田中さんに紙芝居の説明をしてくれたのは当時の会の代表、近藤博昭さんでした。近藤さんたちが披露する紙芝居を見た田中さんは、不思議な「伝える力」を紙芝居に感じたといいます



▲近藤博昭さん(左)と田中昭さん(右)

■大阪で見つけた「伝える方法」

手描きの絵が持つ迫力、生の声での演者と聴衆とのやり取り、テレビやゲーム機にはない特別な魅力に感動した田中さんは「自分が探していた『伝える方法』はこの紙芝居だ」

と想ったそうです。以来、休日を利
用して大阪を行き来して学び始めま
した。紙芝居用の道具も自前で調達
近藤さんの協力を得て、手はじめに
若松の商店街で月一回、紙芝居の実
演を始めました。しかしお客さんは
まばら。それでも我慢強く続けるう
ち、地域や施設のイベント、市民セ
ンターなどから「うちでも紙芝居を
やって！」と声がかかるように。今
では各地からの要望に応えながら公
演活動が続いています。
田中さんは、会社員を続けながら
活動する「サラリーマン紙芝居師」
という近藤さんの生き方にも感動
同じく仕事の合間を利用して活動し
ています。田中さんが公演に使って
いるのは「紙芝居博物館」が保管し
ている昔ながらのオリジナル手描き
作品です。おとぎ話はもちろん、怪
奇もの、人情もの、冒険物語、クイ
ズものなど多種多様です。



▲「塩崎おとぎ紙芝居博物館」所蔵の紙芝居の作品(田中さん提供)

田中さんの紙芝居の公演希望 いきステにお寄せください

現在「三邑会」の会員は20人足らず。その中で九州の会員は田中さん一人です。師匠、の近藤さんは昨年、81歳で亡くなりました。田中さんは塩崎さんや近藤さんが紙芝居にかけた生涯を引き継ごうと頑張っています。高齢者には昔懐かしく、若者には新しい感動の「紙芝居」。そんな紙芝居の魅力を多くの人に知ってほしいと、可能な限り公演要請に応じています。公演開催ご希望の方は「いきがい活動ステーション」にご連絡ください。

■子どもたちの夢と希望の象徴
街頭紙芝居が最も盛んだったのは終戦直後から昭和30年前後にかけて。戦後のすさんだ街に、拍子木の音とともに現れる紙芝居のおじさんは、当時の子供たちにとって夢と希望の象徴でした。「紙芝居には直接のふれあいと対話がある。それが平和の原点が近藤さんの口癖でした。「紙芝居を見ていると、子どもたちも積極的にしゃべりだします。いろんな新しい遊びや娯楽があってもいいが、生のふれあいとコミュニケーションの大切さを教えてくれる紙芝居の魅力は絶やしてはならない」と語る田中さんは今、紙芝居の継承に決意を新たにしています。

